

道 徳

北 野 美 紀
盛 一 純 平

1 道徳における見つめ直しのある聞き合い

※1 内面的資
質・道徳的実践
力

道徳的心情、道
徳的判断力、道
徳的实践意欲と
態度を包括した
もの

※2 内省

自ら省みること

ねらいとする価値について 内面的資質 道徳的实践力※¹の向上につなげるため
他の考えと自分の考えを比較し共感し合いながら 個が内省※²する姿

新学習指導要領解説道徳編では、「生きる上で基盤となる道徳的価値観の形成」「児童の自立心や自律性、生命を尊重する心の育成」が述べられている。その際大切になるのは、「自己理解を深め、自己を肯定的に受け止めること」と、「自己に責任をもち、自律的な態度をもつこと」の両面を身に付けていくことである。それは言い換えれば、「一人一人が道徳的価値を自分の内面から自覚し、将来出会うであろう様々な場面において、道徳的価値を実現するための適切な行為を主体的に選択し、実践できるような内面的資質」をもつことだろう。

道徳の時間では、まずねらいとする価値について“自分はいつもどんなふうに行動しているだろう”“それはどうしてだろう”などと問題意識をもって自分を見つめる自己理解が必要である。現状を出し合う中で、今もっている価値に対する自分の考えを客観的にとらえていく。そして、そこから新しい価値の追求が始まる。心に響く資料や豊かな体験をもとに、一人一人が根拠を大切にしたい考えをもち、多様な考えを受けとめ合う。さらに他と主体的にかかわることによって比較・共感・疑問といった見つめ直しが生まれ、自己理解や他者理解を深めていく。これこそが道徳でねらう価値の追求と言える。

道徳における聞き合いは、考えをまとめあげたり絞ったりするためではなく、個の考えを磨き広めるためのものである。聞き合いによって価値についての多様な考えに出会い、自分にはなかった価値に対する考えを獲得し、補充・深化・統合をくり返ししながら内面的資質を高めていく。これが、具体的な生活の場面において道徳的实践力となって表れるだろう。

2 見つめ直しへと向かう状態

子どもたちは、課題や資料、友だちの考えに出会い、自分の価値観に揺れが生じたときに、見つめ直しへと意識が動く。

(1) 価値との出会い・把握

資料と出会い、獲得したい価値について、今自分の持っている価値観を把握することで、他との違いを感じる。

- ・自分は、～な考えをすることが多い
- ・自分はいつも～な行動をとることが多い

(2) 価値の追求

資料の中の登場人物について、具体的な場面から、心情を考えたり、どう行動すべきか迷いを出し合い比較する中で、共感や疑問が生まれ、整理したいと感じる。

- ・そうか、そんな考えもあるのか
- ・やっぱりそれは大事なこともかもしれない
- ・あれ？そうかな？ わからなくなった

(3) 価値の創造・獲得

今まで自分になかった考えを取り入れ、具体的に行動に移すための意欲に変える。

- ・自分は、これから～考えていきたい
- ・自分は、～ことができるようになりたい

3 受けとめ合いを通して見つめ直すための手だて

(1) 生活場面にあったねらいや資料の設定

発達段階を考慮し、子どもの生活場面にあったねらいを設定する。行事を通して、一人一人が自分の思いと集団の中での役割で揺れ動いた経験が、ねらいとする価値への理解を深め、これからの道徳的实践意欲や態度を育てていく。さらには、子どもの実態に応じ、自作資料を含め、登場人物に同化しやすいような資料を選定することが、子どもに受けとめ合いの必要感をもたせることになる。また、資料の種類も、写真・作文・映像などのように、子どもが関心をもちやすいものを工夫する。そうした工夫によって多様な考えを出させることで、価値に対する考えの揺れが生じ、よりよい生き方を選ぶという必要感につながる。また「あゆみ」「道徳ノート」などを資料として活用することで、本音を出し合い、心を揺さぶる課題が生まれ、自己の見つめ直しへとつながる。

(2) 共通体験の積み重ねと想起

豊かに人とのかかわる共通体験の中から、よりよい生き方を考えるきっかけや根拠をもたせたい。行事はもちろん、日常の小さな出来事を一つ一つ共通体験として積み重ねることができれば、内面的資質を高め、道徳的判断を迫られたときのよりどころにもなる。そこで、教師がその共通体験を意識的に作り出し、丁寧に記録を残すなどの工夫をしながら想起を促す。聞き合いの中に体験が盛り込まれることで、ねらいとする価値がより具体的に語られる。また、価値の追求のあとで、自分の生活をふり返る際に、これまでの体験が結びつけば、より確かな価値として獲得され、道徳的实践力につながるだろう。

(3) 考えを比較・共有するための視覚的表現の工夫

ねらいとする価値に迫る際、一人の子どもの思考の中でも多様なものが入り交じることがある。そこで、教具を工夫したり、役割演技など言語以外の表現方法を用いて視覚的に表したりすることで、多様な気持ちを素直に表現できるようにする。個々の考えが少しずつ違って表れることで、その考えの根拠となるものを言語化しようとする意欲につながる。さらに、それを記録することは自己の変容を残し、自覚を高めていくための手段にもなる。少人数ならば、ホワイトボードミーティングなどの方法で効果的に可視化した後、全体に考えを広めたり、互いの考えを比べたりすることも有効である。

(4) 目的に応じた交流の工夫

ねらいとする価値や資料によっては、葛藤場面のように互いの意見が対立する場面が考えられる。そのような場合、自分の考えの強化や補充、価値の追求のために、ペアや少人数グループを利用した聞き合いの活動を取り入れる。共通意見・対立意見を明確にして意図的にグループを編成したり、ランダムに多様な考えに触れられる場を設けたりする。このように、受けとめ合いの場を工夫することで、一人一人の価値に対する考えに揺れが生じやすくなる。そして、より高い価値の創造に向けて見つめ直すきっかけとなる。

4 実践例

(1) 生活場面にあったねらいや資料の設定

子どもが、主体的に互いの思いや考えを受けとめ合い見つめ直す時、そこには「知りたい」「考えたい」という必要感があるとより深まる。そこで、子どもの生活場面に沿い、実態にあった資料選定をすることが見つめ直しを生むと考えた。

① 自作資料「組体操」

組
体
操

「すごいねえ」
「かっこいいなあ」
四年生のときの運動会。あき子は五・六年生の組体操にくぎづけだった。なにしろピラミッドがすごい。一段一段積みあげていくピラミッドの一番上にかけあがるあのすばやさ。そして一番上でかみが風に吹かれてさらさらとゆれる・・・なんてかっこいいだろう。
「私も五年生になったらあの一番上に上りたい」
あき子はそう思っていた。・・・
(略)

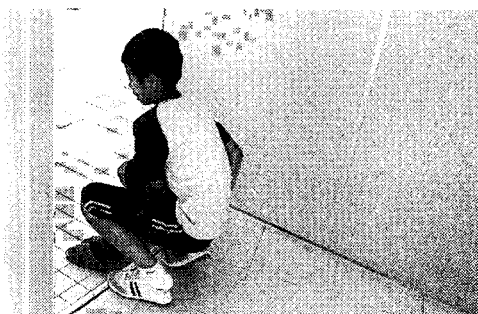
運動会練習が始まった5月、今まで見る側だった組体操を今年は自分たちがやる番だという意気込みにあふれていた。練習を重ねるにつれ、「高学年全体の演技成功のためにがんばらなくては」という意欲と「どうして目立たないところでこんなにつらい思いを続けなくてはならないのか」という不満の両方で意欲を持続することも難しかった。自作資料「組体操」(資料1)では、体の大きな主人公あき子が、ピラミッドの土台の役割を担うが、つらいばかりでやる気が出ない。まわりの友だちから責められる中、「あたしもこわいけど、あき子のおかげでがんばれるよ」という友達の一言もあり何とか本番を成功させる。その時のあき子のすがすがしい気持ちに迫る資料とした。

こういった自作資料は主人公の心情に迫りやすく、大切にしたい価値を容易に理解でき、考えの受けとめ合いの時間をしっかり確保することができる。本資料では、つらいことも努力してやりきることですすがすがしい気持ちになれるという「希望 勇気 努力」と、自分が責任を果たしたことでみ

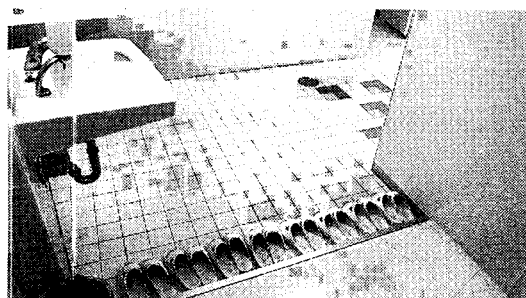
んなの役に立ち、大きな喜びにつながったという「役割 責任」の二つの価値を比較して取り上げた。そして、高学年として集団への責任というより高い価値を見つめ直すことができた。

② 生活場面からの写真活用

本時の導入では、合宿でトイレのスリッパを並べ直してくれている男子の写真と散らかって



いた学年のマジックを使いやすいように整理してくれている5年女子の写真の2枚を用いた(資料2)。「誰の写真かな?」「どこで何をしているんだろう?」と興味を持つ様子が見られた。そこで「今日考えてみたいことは?」と問いかけると親切ややさしさという反応だったが、「親切とは少しちがうかも…」と返すことで、意識が高まった。資料「どろだらけのスパイク」では、自分の気持ちとお店の人や次に来るお客さんなどのまわりの人の気持ちの両方を視点にした。主人公の心情を考えていくうちに、みんなが気持ちよく過ごすために何ができるかを意識し始め、導入時に提示した写真と結びつけて、「マナー」「礼儀」「気配り」といった言葉が出始めた。さらに、まわりの人たちが気持ちよく過ごすための「気配り」を「スペシャルホット」と名付けたことで、自分たちの身のまわりで写真のような「気配り」が他にないだろうかと意識が移った。生活



の中で具体的な場面を思い出しながら、本の整理、ドアを押さえてあげる、気持ちよいあいさつをするなどのふとした行動がクローズアップされた。こうして、ねらいとする価値「礼儀」に近付くことができた。

これらの実践から、自分の生活に即した場でねらいや資料を設定することが共感的な見つめ直しに有効であると考ええる。



資料2 生活場面を生かした写真

(2) 共通体験の積み重ねと想起

互いの思いや考えをより共感的に受けとめ合うために、より多くの共通体験があることが望まれる。受けとめ合いの中で、共通体験を通して感じた思いを想起することにより、もう一度自分の考えを見つめ直してみたいという意識が生まれると考えた。

① 成長カレンダー

学級掲示板の中心に、月ごとのカレンダーを位置付けている。本来は高学年として先の見通しをもつためのカレンダーだったが、生活の中での何気ない行動も、できるだけ全体の共通体験として意識にとどめておきたいと考えた。学年目標にもある「向上」を意識して、「クラスの成長カレンダー」と名付け、毎日の終わりの会の「今日のカレンダー」コーナーで、子どもの言葉による記録を続けている（資料3）。これによって、様々な生活体験やその時の思いを全体に広めたり、あらためて見つめ直したりするきっかけにしている。さらに後に自分がおかれた状況に応じて、どんな行動をとるかの判断材料にもなりうる。

ある日クラスで盛り上がっていたSケンが原因であやうくケガをしまいそうな大きなケンカが起きた。学級会でその話題を取り上げ、それぞれの思いを出し合った。結果にこだわり勝敗が大事だと考える子や仲間作りを大事に考える子など、大好きなSケンだからこそ、休み時間にはやめた方がよいのではないかと真剣に話し合った。最終的には、「何でも禁止するのではなく、トラブルはみんなで毎回解決していこう」「ケガが起こるのは、絶対によくない。感情が高ぶりすぎたときは、仲間の力でブレーキをかけよう」という結論に至った。カレンダーにはそのことも記録され、その後のトラブルでは「あのときもそうだったけど、仲間の力でお互いの気持ちをやわらげていこう」というように、先の価値観が生かされ、心のもち方を決める材料になっている。



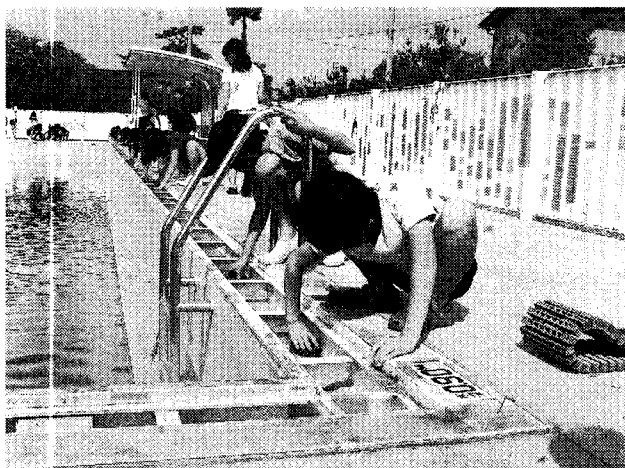
- ・ふじだなおとぎかい
5年生らしく役割を果たそう
- ・縦割りグループ発足！
リーダーを支えよう 新しい仲間
- ・Sケンで大げんか！
本音を出し合って、みんなで解決



資料3 共通体験の足跡を残す「成長カレンダー」

② あゆみ、レベルアップノートの継続

毎回行事を終えた後には「レベルアップノート（道徳ノート）」にふりかえりを書かせ、交流の機会を作っている。その際のふりかえりは意識して「自分の変化や成長を見つめよう」と



資料4 プール掃除に向けての写真

へなるほどね
「わかった気がする」
今日のプールそうじ。先生はこの間「昨年の5年生は終わった後『楽しかった』って言ってましたよ」と話してくれました。そのときは「このきたない所をさわって何が楽しい？」と思い、理解できませんでした。が、みがいた所がキレイになってく！たしかにすごく楽しい！わたしは何時間でもやっていくつもりでした。そしてわたしも最後は「楽しかった」と言って終わりました。こついうことか・・・

資料5 あゆみに綴られた気持ちの変容

へさすがー
ぼくたちのとは少しちがった。みんなお互いに協力し合っていた。「みんなのためにがんばろう」という気持ちがあったからこそ、ああして協力し合えるんだなと思った。さすが6年生。もちろんぼくも協力し合ってたけど、すげじゃないけど、6年生はてきぱきと行動していたし、すごいと思った。ぼくは、あんな6年生になりたいと思った。
プール見る
今日6年生のプールそうじを見ました。とてもこついで水はドロドロだったけど、手ですくってバケツに入っていました。わたしは「すごいなあ」と思いました。心の中ではいやだと思っていたと思うけど、それを口に出して言わないところが6年生らしいと尊敬してしまいました。わたしもそんな6年生になれるといいなあ。

資料6 6年生のプール掃除を見学した後の意識 あゆみより

指導してきた。行事を通して自分の成長を見つめさせ、高学年として集団の中での自分の役割や責任を自覚することにつなげていくためである。さらには学級だよりや終わりの会などでも互いの成長を認め合う場を大切にし、いつでもクラス全体でその場にあった価値について考えられるようにしてきた。

同様に本校で毎日綴っている日記「あゆみ」を使って子どものふとした気づきを全体に広めることも継続している。どんな行動が人の気持ちを和ませるのか、どんな心の持ち方が自分の成長につながるのか、などについて話し合う場を設けることができる。

プール掃除の時、5年生はプールサイドの汚れをとる役割を担った。「役割・責任」と「愛校心」をねらいとして、昨年度の5年生の写真や感想を紹介した（資料4）。昨年の感想の中には「プール掃除はとても楽しかった」という感想があった。また、兄弟から「プール掃除は楽しい またやりたい」と聞いていた子は「あゆみ」に「そんなにきたないところをさわって何が楽しいの？」と綴っていた。しかし、実際にプール掃除を終えてみると、<なるほどね>という題で、すがすがしい気持ちを綴っていた（資料5）。また、後日6年生がぬるぬるしたプールの中をこすりながら掃除している様子を見に行った。その時も、自分たちとの意識の違いを感じ「あゆみ」に「あんな6年生になりたい」と綴っていた（資料6）。

このような日常のささやかな気づきを書き記しためていくことが、後々自分の変容について客観的に意識できるきっかけにもなるだろう。さらには、学級だよりなどで個の思いを全体で共有することが共通体験の幅を広げることにもつながると考える。

これらの実践から共通体験の積み重ねや想起によって、思いがより具体的に語られ、価値に対するお互いの考えがより深く共通理解できることがわかった。これは個の内省にとってとても有効であると考え。

(3) 考えを比較・共有するための視覚的表現の工夫

子どもの受けとめ合いにおいて、価値について言語化することは難しい。表現が言葉足らずになったり、恥ずかしさで人前に思いをうまく表出できなかったりすることがよくある。そこで、互いの思いや考えをより素直に受けとめ合うために、視覚的な表現を補うことが有効であると考えた。

① ワークシート「マンダラート」、心のカードの活用

組体操の本番を成功させて「よかった」とつぶやいた主人公あき子的心情を考える際、多様な考えが出ることを期待して、聞き合いの前のワークシートとしてマンダラート（資料7）を用いた。マスをうめながらあき子的心情を考えることで多様な考え思いを出させたいと考えた。これまでに、マインドマップを用いて思いをつなげたり広げたりすることは経験していたため、比較的短い時間であき子的心情を考えることができた。マンダラートではマスによって数が限定されていることにより、マスを埋めようという意欲が思考の広がりを助けてくれるという特徴がある。この活動の結果、互いにあき子的心情を聞き合う中で、多様な考えが出された。これによって、主人公の「よかった」の言葉の中にある喜びには、とにかく「自分」がやり終えた喜びと自分の力が「みんな」の成功のために役に立った喜びの2種類があることもはっきりさせることができた。

自分の役が、 よかった。	自分が受けていて、 どうもよかったと 感じたから。	組体操のセリモノ が成功した。
みんなの笑顔が 見えた。	◎あき子は、 何が「よかった」 のかな？	みているから手は もえた。
ちゃんとまんなで きた。（やりおえた）	いかに満足でい （？）になった。	責任をはたきこ ひきた。

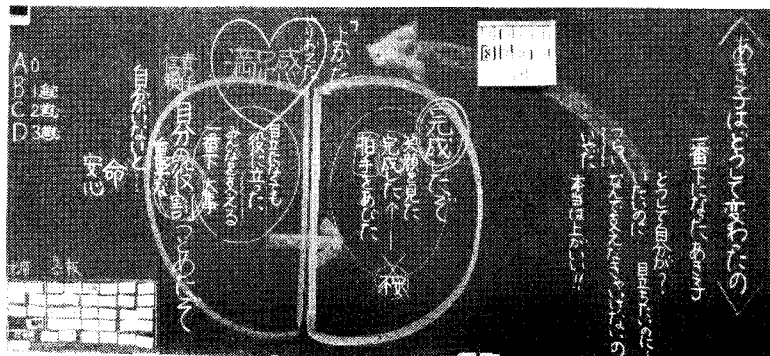
資料7 多様な考えを生むためのマンダラート

その上で主人公の心の中にある2種類の喜びを「心のカード」ver. 1で表現させてみた（資料8）。これまでは、対照的な価値について「心のカード」を用いたことはあったが、同じ「喜び」という視点で分析させてみると、それぞれの喜びの内容を分けて考え始める姿が見られた。その中で、「拍手をもらってうれしかったんじゃない」「みんなの笑顔を見ることができてホッとしたんじゃない」といった個人的な（小さな）満足感と、「自分の役割を果たせたから」「みんなのためにがんばったから」といった集団の一員としての



資料8 心のカードで考えを視覚化する

（大きな）満足感の違いに気付いた。こうして高学年としての自分を根拠として重ね合わせながら見つめ直しがすすんでいった。さらに、この見つめ直しを再度「心のカード」ver. 2として表すことで、個の考えの変容を視覚的にとらえることができた。また、板書でも種類の違う



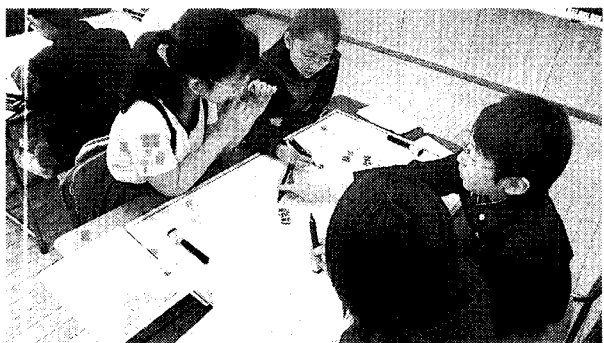
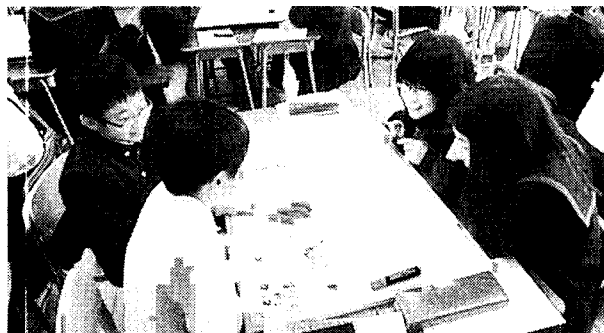
資料9 価値を意識するための板書

価値が混じり合っている心情を整理して位置付けていった（資料9）。その際、満足感をキーワードとし、種類の違いを自分たちの経験と重ね合わせやすいように工夫した。このことで、

一つの行動の中にも多様な価値が含まれていることや、状況に応じて大切にしたい価値があることを視覚的に確かめながら、受けとめ合いがすすんだ。

② ホワイトボードミーティング

グループで互いの考えの受けとめ合いをしていく際に、出された考えを比較・分類したり、



資料 10 ホワイトボードを使った考えの受けとめ合い

つなげたりする手だてとしてホワイトボードを用いた(資料 10)。それぞれの思いを出し合いながらボードに位置付ける時、子どもにとって分類や整理が行われやすいというメリットがあった。価値に対するキーワードが明確になり、これからの自分の行動を考える上で判断の基準がイメージしやすくなった。また、グループ内で考えを交流した後は、書かれたホワイトボードを見合ったり簡単に紹介し合う時間を設けることで、他のグループの様子を知る手だてとしても有効であった。子どもは、「自分たちと似ている」「ん？それはどういう考えなんだろう」と比較しながら、価値についての互いの考えの聞き合いが行われた。

これらの実践により、思いを視覚化することで、互いの価値が明確になり比較・分析のある受けとめ合いになった。

(4) 目的に応じた交流の工夫

互いの思いや考えをより多く有効に受けとめ合うためには、自分の考えの補充・深化・統合につながるような多様な考えを交流する工夫が必要である。大事にしたい価値観や子どもたちの現状に合わせ、より見つめ直しが生まれやすくなるような交流方法を試みた。

① ワールドカフェ形式のグループ交流

価値に対する多様な考えが出そうな場面ではその内容によって共通意見・対立意見などのように意図的にグループを編成して聞き合いの場を設けることも多い。それによってそれぞれが大事にしたいと考えている価値のとらえがはっきりしてくる。しかし、ここでは価値に対するとらえを明確にするより、多様な考えを出し合うことをねらってワールドカフェの形態を試みた(資料 11)。主人公の心情を考え、交流の前に書いたマンドラートをもとに、四人ずつの生活班で考えの交流をする時間を持った。時間を区切り、決められたルールにしたがってメンバーを入れ替えながら、3回の交流の時間を作った。少人数ということもあり、気負うことなく自分の考えが出された。その中で、「うん、ぼくも同じで・・・」「ちょっと似ているんだけど・・・」といった考えの広がり生まれ、短い時間でも多くの交流が持てるというメリットを生かすことができた。主人公の喜びは「お客さんの笑顔が見られたから」と考えていた子が「上に乗る人を安心させるくらい人の役に立てたから」と変容し、また「いたいけどがんばったから」と考えていた子が「上の人の命を預かるくらいの自分の役割が成功したから」と変



資料 11 ワールドカフェの形態を使った考えの交流

容していった。友だちの考えに触れるたびに、子どもの中には見つめ直しが生まれ、移動の間や交流の最中にも最初の考えが変容していく様子（資料12）が見られた。このことから、多様な考えに触れるためにはワールドカフェの形態は有効であり、自分の価値のとらえをより強めたり新しい視点の価値を獲得したりする際、一人一人の必要感に対応できる手だてだった。

② アイスブレイク

受けとめ合いの中で、他に対して共感的に接するには、自分の心の中に余裕や思いやりがなければならない。そこで共感的人間関係作りをねらって、アイスブレイクを取り入れたグループでの交流を試みた。少人数グループの中では、自分の意見が誰かと違っていても話しやすく、違った視点の意見のよってグループ内の聞き合いは盛り上がる。「Yes And ゲーム」では、「昼休み遊ぼう」のテーマから「いいね、じゃあ〇〇さんも誘おう」「いいね、じゃあ一緒にSケンしよう」「いいね、じゃあ今日の宝は〇〇にしよう」といったように相手の意見を受け入れながらさらに付け足していくことで、共感的にテーマについての会話をふくらませた。一人一人が大事だと感じる観点が少しずつ組み合わされてグループとして満足できる昼休みに近付いていた。

このように共感的人間関係を築くための交流を意図的に組み込むことで、価値に対する互いの考えに違いがあっても、認め合える関係ができていった。そうしたうえで、対立する考えを取り上げて交流するなど、段階的な受けとめ合いによってより見つめ直しが深まると考える。

5 成果と課題

以上の実践から大きく2点について成果を得ることができたと考える。

まず1点目に、「子どもに必要感をもたせることで、見つめ直そうとする意欲を高められる」ということである。子どもの実態に合わせたねらいを設定し、必要感をもたせることで価値について見つめ直そうとする意欲は高まる。生活場面に合った課題設定や体験活動の想起のように子どもの生活にかかわる内容の工夫がそれに当たる。これによって、より具体的な受けとめ合いが生まれ、「価値の自覚」につながった。2点目に「手だてを工夫することで価値の自覚をより強化することができた」ということである。子どもは自分なりの考えをもった上で、多様な考えを受けとめ合う。そこで考えが揺れたり、逆に考えを強めたりする。その変容を、言語化することで、価値の自覚がより強化できる。それを助ける手だてでは、視覚化や交流方法を工夫することが有効だった。自ら進んで新しい価値を獲得したいと思わせる場や時間を工夫することで、明確な「価値の自覚」につながった。

また、新たな課題も見えてきた。受けとめ合いによって新しい考えに出会った時、子どもたちは必ず内省している。その内省を確かな道徳的実践力につなげるための有効な手だてを探っていかなければならない。

